

— 町道善正寺平線新設工事事業に伴う —

# 御茶屋床上遺跡

2007年3月

島根県津和野町教育委員会

— 町道善正寺平線新設工事事業に伴う —

# 御茶屋床上遺跡

2007年3月

島根県津和野町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、島根県鹿足郡津和野町教育委員会が平成17年度に行った町道善正寺平線新設工事事業に伴う、御茶屋床上遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化財課				
	広島県立美術館学芸課長		村上	勇	
	梅光学院大学教授		渡辺	一雄	
事務局	津和野町教育委員会	教育長	斎藤	数弘	
		教育次長	廣石	修	
		文化財係	米本	潔	
調査員	津和野町教育委員会	係長	中井	將胤	
		文化財係	宮田	健一	
調査補助員	永田　茂美	濱浦　健太	椋木　牧子	麻野　達	
調査参加者	山田　頼之	大庭　学	大井　将正	久保　政幸	井筒　一洋
	吉永　種男	小山　博道	河田　照雄	佐藤　武文	佐伯　昌俊

3. 発掘調査に際しては、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、また梅光学院大学の渡辺一雄教授からも一方ならぬお世話をいただいたことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、所有者の中川佳彦氏をはじめとし、地元の方々にご協力を得るなど、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、溝状遺構－S Dと略号している。なお、現場あるいは編集に利用した現地図は、日原土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また、位置図などは1/25,000を使用した。なお、現地における基準点測量は、株式会社ワールドの協力を得て行った。

5. 調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

6. 本書は宮田・永田・濱浦・椋木・佐伯・麻野氏の協力のもと、中井將胤が編集にあたった。

# 目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過 .....	1
第1節 発掘調査の経緯 .....	1
第2節 発掘調査の経過 .....	1
第2章 地区の概況 .....	2
第1節 地理的環境と地形的立地 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査概要 .....	4
第1節 調査区の設定 .....	4
第2節 層序と層位 .....	5
1. はじめに .....	5
2. A区の層序状況 .....	5
3. B区の層序状況 .....	5
4. C・D区の層序状況 .....	5
5. 調査区全体の層序状況 .....	5
第3節 遺構 .....	7
1. はじめに .....	7
2. 検出遺構 .....	7
第4章 出土遺物 .....	8
第1節 はじめに .....	8
第2節 実測遺物 .....	9
1. 石器類 .....	9
2. 陶磁器類 .....	12
3. その他 .....	12
第5章 小 結 .....	16

## 挿図・図表目次

第1図 位置図 .....	1
第2図 地形断面図 .....	2
第3図 位置と周辺の遺跡分布 .....	3
第4図 調査区配置図 .....	4
第5図 調査地区名図 .....	4
第6図 土層図 .....	6
第7図 遺構図 .....	7
第8図 遺構土層図 .....	7
第9図 遺物実測図1（石器） .....	9
第10図 遺物実測図2（陶磁器類1） .....	11
第11図 遺物実測図3（陶磁器類2） .....	13
第12図 遺物実測図4（その他1） .....	14
第13図 遺物実測図4（その他2） .....	15
第1表 遺物出土状況表 .....	8
第2表 出土遺物計測表 .....	10

## 図版目次

- 図版 1 1 調査地点鳥瞰
- 図版 2 1 南からみた遺跡の近景 2 北からみた遺跡の近景
- 図版 3 1 B調査区北壁 2 B調査区南壁  
3 C調査区南壁
- 図版 4 1 SD01検出状況(南から) 2 SD01・02完掘状況  
3 SD01土層(北側)
- 図版 5 1 石器出土状況 2 土錐出土状況  
3 陶磁器出土状況 4 陶磁器出土状況  
5 陶磁器出土状況 6 古銭出土状況
- 図版 6 1 発掘作業風景 2 発掘作業風景  
3 発掘体験授業風景(青原小学校)
- 図版 7 1 発掘調査完掘状況(北から) 2 発掘調査完掘状況(南から)
- 図版 8 1 出土遺物(石器) 2 出土遺物(陶磁器類1)  
3 出土遺物(陶磁器類2) 4 出土遺物(陶磁器類3)
- 図版 9 1 出土遺物(陶磁器類4) 2 出土遺物(その他1)  
3 出土遺物(その他2) 4 出土遺物(その他3)

# 第1章 発掘調査の経緯と経過

## 第1節 発掘調査の経緯

平成17年8月、建設課より町道善正寺平線新設工事地内の埋蔵文化財の有無、及び取扱いについての照会が日原町教育委員会になされた。これに対して日原町教育委員会では、対象地に隣接して青原代官所、青原代官屋敷遺跡（古墳時代）があることから、試掘調査による確認が必要である旨を回答した。そして試掘調査を、平成17年9月1日から同年9月15日まで実施し、2箇所の地点から陶磁器等の遺物が出土したため、遺跡の所在が明らかになった。

本遺跡は、島根県鹿足郡津和野町青原に所在し、その地点の地名が御茶屋床上（おちゃやどこかみ）と呼称されていることから御茶屋床上遺跡と命名した。

試掘調査では、第2層橙褐色土から第4層灰褐色粘質土までの範囲から江戸時代の陶磁器が出土している。しかし、造構等は確認することは出来ず、試掘調査という狭い調査範囲からでは遺跡の全容を明らかにすることはできなかった。



第1図 位置図

## 第2節 発掘調査の経過

上記のとおり、本地点が遺跡であることが確認されたため、平成17年9月15日、島根県教育委員会文化財課の丹羽野氏、旧津和野町教育委員会の宮田氏から現地指導を受け、同年度において本格調査を実施することにした。なお、9月25日に合併を控えていたため、本格調査の実施は新町になってからの新体制で行うこととした。

合併後、平成17年11月14日付で、島根県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘調査の書類を提出し、調査は同年11月17日から行った。調査中には、島根県教育委員会文化財課の東森氏から、今後の調査方法や出土遺物についての指導を受けた。そして、現地調査は平成18年2月6日に無事終了した。

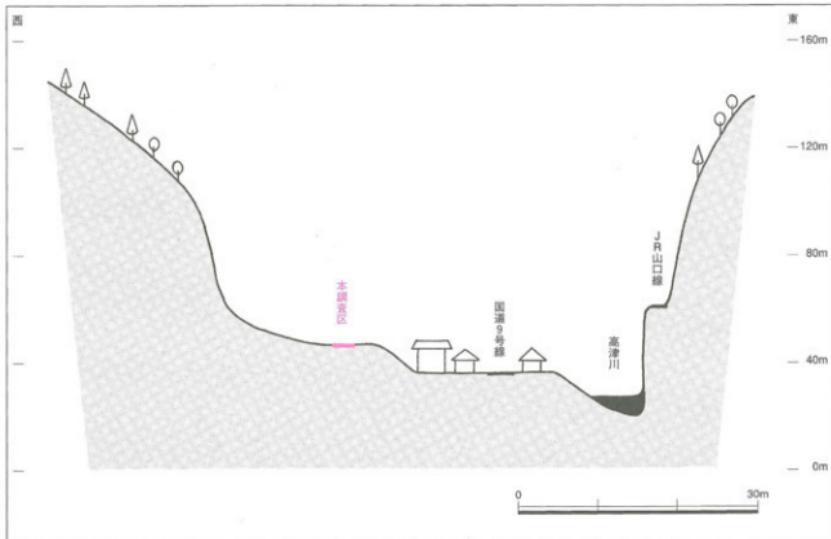
さらに、平成18年3月17日には、広島県立美術館の村上氏、梅光学院大学の渡辺教授、県文化財課の西尾氏が来町され、出土遺物についての指導を受けた。

## 第2章 地区の概況

### 第1節 地理的環境と地形的立地

本遺跡が所在する津和野町は、島根県西部に位置（第1図）し、平成17年9月25日に合併が行われたため、現在では北・東側が益田市、南側が吉賀町、西側が山口県に接した位置に存在する。そして、東西27km、南北19kmを測り、総面積307.09km<sup>2</sup>となる。また、総面積の約8割以上が山林で、高津川や津和野川の流域とその支流が入り込み、流域に市街地、集落、農地が点在し、まさに典型的な中間地域である。

本遺跡は、島根県津和野町青原301番地に所在し、本町の北東部にあたる、益田市との町境に位置する。該当地は南西から北東方向に流下する高津川の左岸にあり、西側山の山裾からなる河岸段丘上、標高約46.1mを測る位置に立地している（第2図）。



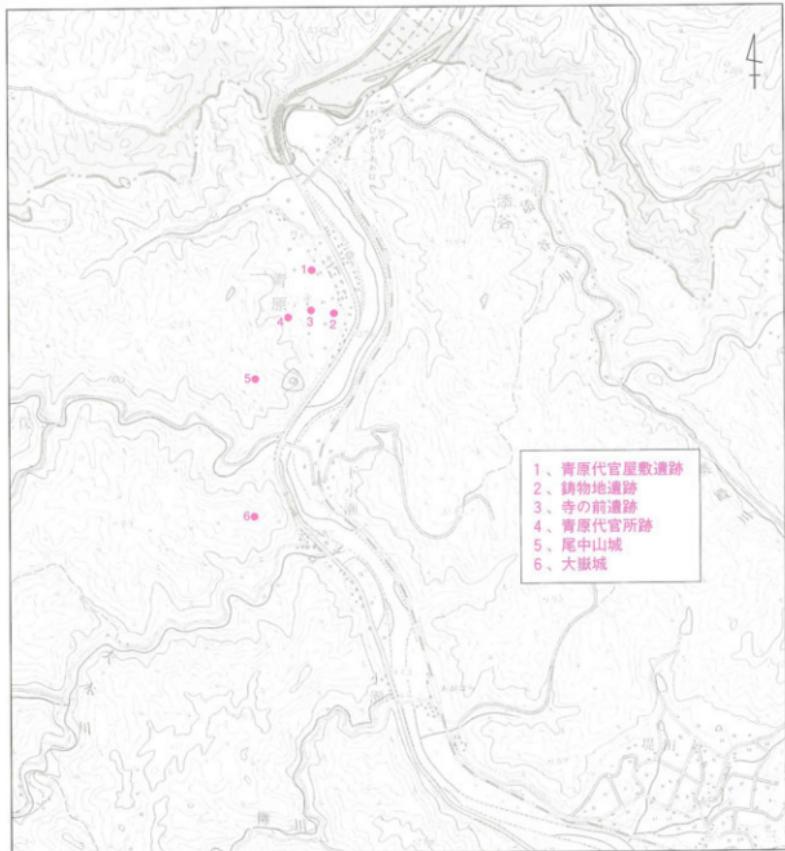
第2図 地形断面図

### 第2節 歴史的環境

本地区における遺跡は（第3図）、青原代官屋敷遺跡と平成13年度に行われた試掘調査において確認された寺の前遺跡、鉄物地遺跡がある。本遺跡の北側に隣接する青原代官屋敷遺跡では古墳時代の須

恵器片が見つかっている。また、南側に位置する寺の前遺跡、南東側に位置する鎔物地遺跡は、いずれも縄文時代の石器、中世・近世期の陶磁器片などが出土している。ただし、これらの遺跡はいずれも本格調査を実施していないので遺跡の全貌は明らかにされていない。

中世以降の史跡等においては、比較的多く分布しており、本遺跡を中心に南西側には中世の山城である尾中山城、大嶽城がある。また南東側300m、東側100mの所には宝篋印塔や五輪塔などの中世時代の石造物も数基現存する。北東側の本遺跡と隣接する地点は、津和野藩の青原代官所跡があり、特に江戸時代においては宿場町として栄え、立地的にも交通の要所となる地域であった。そのため、多くの人々がこの地で生活を営んでいたと考えられる。また、全国測量をした伊能忠敬一行が、山陰道の測量調査時に青原で宿泊しており、そのことが『伊能忠敬 測量日記 第3巻』に記載されている。



第3図 位置と周辺の遺跡分布

## 第3章 調査概要

### 第1節 調査区の設定

平成17年9月に実施した試掘調査地点を中心に本格調査区を設けることにした。まず最初に、東西に道路幅である4mを設定し、南北に9mの長方形区を設けた。次いで南側に幅1mを測るベルトを残し、南北に4m×9mの長方形区を設け、さらに南側へ幅1mのベルトを残し2m×10mの長方形区を設定した。そして遺跡の範囲を確認するため一番北側の調査区から幅1mのベルトを残し4m×2mの長方形区を設けることにした。そして調査面積は、合計132m<sup>2</sup>を測る（第4図）。

最終的に、これらの調査区を北側からA、B、C、D区とした。また、それぞれの調査区の間にあるベルトは掘削せず残すこととした（第5図）。



第4図 調査区配置図



第5図 調査地区名図

## 第2節 層序と層位

### 1.はじめに

本節で記している土層の色彩は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人 日本色彩研究所が監修している、小山正忠・竹原秀雄 著『新版 標準土色帖 2004年版』を使用している。

### 2. A区の層序状況

A区の基本層序は、1層の灰黄色粘質土（Hue 10YR 4/2耕作土）が地山の上に盛った状況にある。おそらく水田開発のために地山を掘削し、平坦にした上に耕作土を盛ったものと思われる。

### 3. B区の層序状況

B区の基本層序は、北側と南側では層序が異なる。まず北側からみると、上位から1層の灰黄色粘質土（Hue 10YR 4/2耕作土）、2層の褐色粘質土（Hue 10YR 4/6）、3層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4/3）で酸化鉄を多く含む、4層の褐色粘質土（Hue 10YR 4/4）である。調査区の中央部から南側に向けて2層の下位面が1層増えるため、北側の3・4層は南側の4層・5層と同じである。

そして、南側は上位から1層の灰黄色粘質土（Hue 10YR 4/2耕作土）、2層の褐色粘質土（Hue 10YR 4/6）、3層の褐色粘質土（Hue 10YR 4/4）、4層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4/3）で酸化鉄を多く含む、5層の褐色粘質土（Hue 10YR 4/4）、6層の褐色粘質土（Hue 10YR 4/4）で5層よりやや明るい、7層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4/3）で酸化鉄を含む層の順で堆積していた（第6図・図版3）。

### 4. C区・D区の層序状況

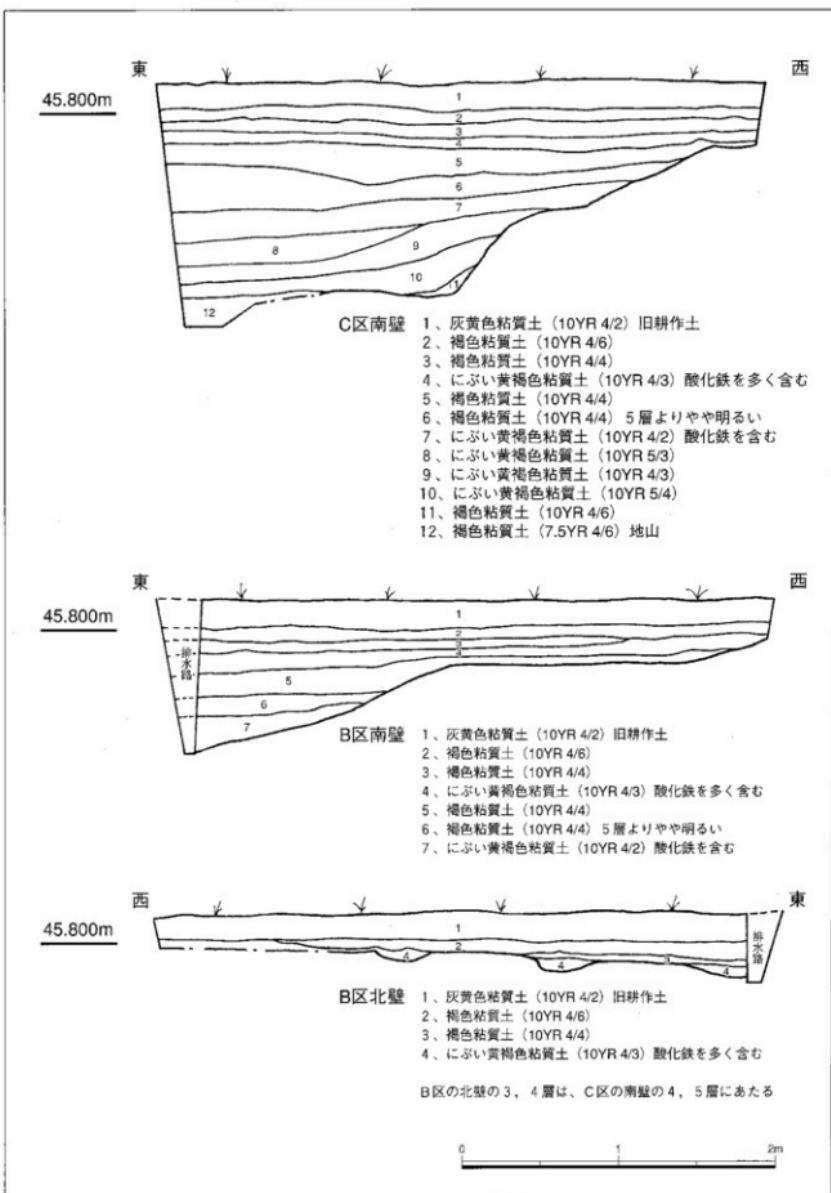
C区北側は、B区同様1層から7層で、調査区中央付近から8層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 5/3）が混入し、9層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 4/3）、10層のにぶい黄褐色粘質土（Hue 10YR 5/4）、11層の褐色粘質土（Hue 10YR 4/6）、12層の褐色粘質土（Hue 7.5YR 4/6地山）の順で堆積していた。しかし、D区については、C区南側とほぼ同様な層序になるが、11層だけは確認できなかった（第6図）。

### 5. 調査区全体の層序状況

以上A～D区の層序をそれぞれ検証した結果、本来の地形は北西側が高く、南西側へ向って傾斜していた地形だったと推定される。そのため、北西側を掘削し南西側へと土を移動させ水田耕作に適した形に開発し、確認できる範囲で2度にわたり水田の開発が行われたと想像された。

層厚については、1層の耕作土が約20cm、2層から4層が約10cm、5層から7層までは約20cmを測り、ほぼ平均に堆積している。8層については、C区中央部がら南西へと堆積している。9・10層は、地山に沿ったかたちで堆積しており、層厚は約20cmを測る（第6図）。

遺物の出土状況としては、3層から7層において多くの陶磁器片などが出土し、8層以降からは、数点の陶磁器が確認されたのみであった。出土遺物の中には石器なども確認されたが、陶磁器と同層から出土しており、そのことからも水田開発により擾乱された層であることを裏付けるものであった。



第6図 土層図

### 第3節 遺構

#### 1. はじめに

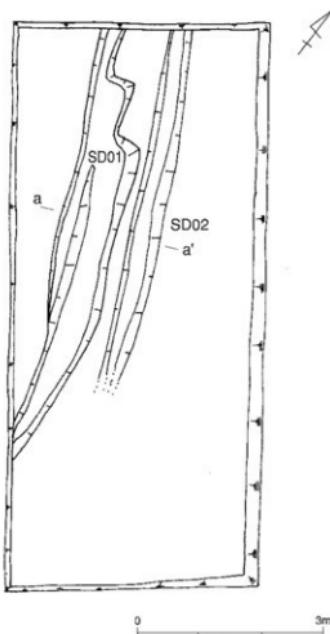
本節で述べる遺構については、確認できたものがB区で検出された溝状遺構のみであったため、その遺構について報告する。また、検出遺構の形状からSDと略号した（第7図・図版4）。

#### 2. 検出遺構

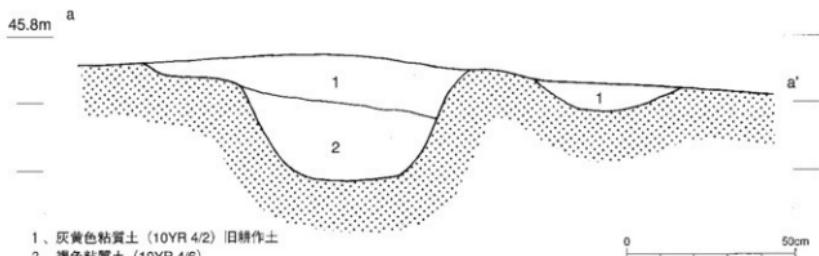
SD01と称した遺構は、B区の西側、標高45.7m地点において検出された。本遺構は、地山を溝状に掘削して作られており、幅40cmから90cm、深さが浅いところで5cm、深いところで37cmを測り、調査区北西側から南方向に確認されている。検出状況から判断すると、幅・深さ共に一定ではなく、特に一部分が長方形状に深く彫り込んだ箇所もあり、溝状遺構と判別したが実際の用途は不明である。

SD02と称した遺構は、SD01遺構の東側に平行する形で検出された。本遺構は、SD01同様に地山を溝状に掘削しており、幅約50cm、深約8cmを測る。比較的浅い溝の跡と考えられた。

以上、簡単にSD01、02について述べたが、狭い範囲の調査のため、遺構全体を確認することができず、いずれも遺物等を伴わない状況での検出であった。そのため、作られた時期や用途については不確定な部分が多い結果となった。なお、SD01については調査区の南西側へ続くと思われた。



第7図 遺構図



第8図 遺構土層図（北壁）

## 第4章 出土遺物

### 第1節 はじめに

本調査においての出土遺物は、石器類4点、土師質土器類103点、陶磁器類766点、土錘7点、鉄器類54点、古銭2点、煙管3点、瓦12点、瓦質53点、須恵器1点その他5点の総数1,010点であった。遺物の出土状況は、調査区、層位ごとに遺物出土状況表（第1表）で示した通りである。また、実測を行った出土遺物の内訳は、出土遺物集計表（第2表）に示しているとおりである。

なお本跡は、層序の節でも述べたが、ほとんどの遺物は水田開発等に伴い搅乱された層中に出土した可能性があった。そのことを最初に断った上で、次節において実測遺物を種類別に詳細に記述していくこととする。

第1表 遺物出土状況表

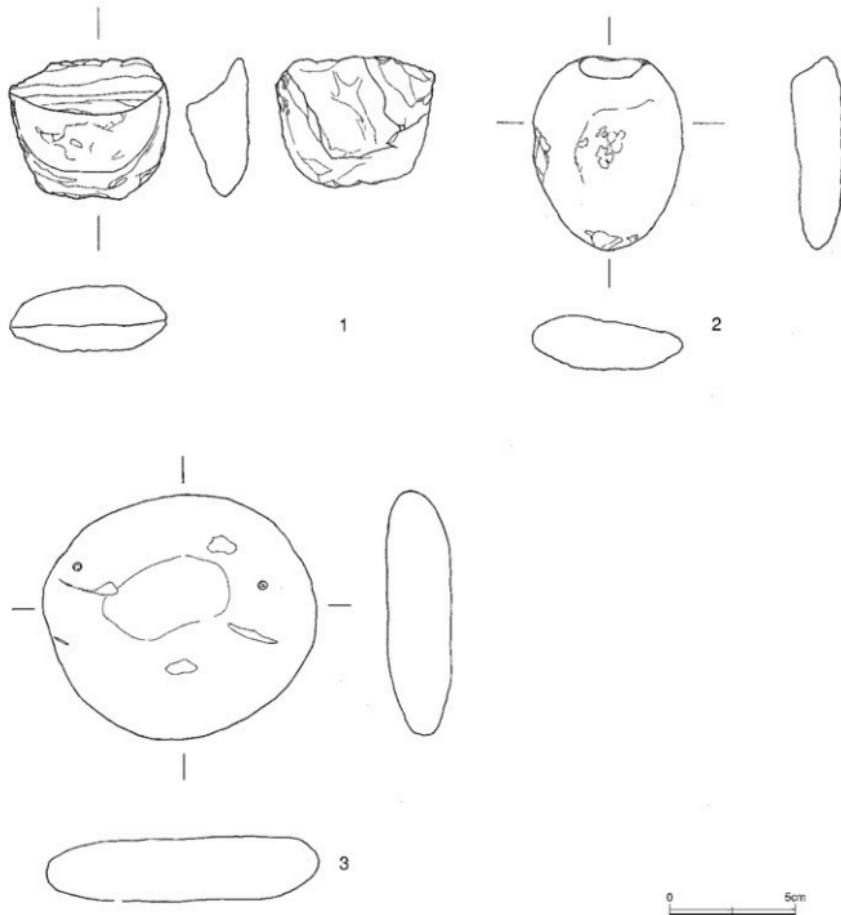
	A区	B区		C区		D区	
		北側	南側	北側	南側	北側	南側
2層	T:19 Fe:1	T:64 Fe:1 K:3 Ga:10 炭:1 Ga5 Z:1		T:57 H:2 Fe:1 Ga:1 K:3	T:64 H:4 Fe:4 Gl:1	T:125 H:10 Fe:6 C:1 K:2 Ga:6	
3層	T:7 H:1	T:45 H:2 Fe:4 P:1 D:1 Ga:7 玉:1	T:33 H:4 Fe:2	T:58 H:9 Fe:6 Ga:2	T:57 H:3 K:2 Ga:9	T:36 Fe:3 D:1 P:1 Ga:1 S:1	T:5 H:3 Fe:1 Ga:3
4層			T:15 H:1 Ga:1	T:9 H:1 K:1 Ga:1	T:20 H:6 Fe:1	T:26 H:14 Fe:3 P:1 Ga:2 玉:1	T:18 H:5 Fe:6 C:1 Ga:1
5層				T:33 H:15 Fe:10 D:1 Su:1 S:2		T:15 H:1 D:1 Fe:1	T:9 D:1 Ga:1
6層				T:9 H:2 D:1 K:1 Ga:1		T:25 H:7 Fe:4 Ga:2 S:1	
7層				T:13 H:9			
8層							
9層							
10層				T:8 H:4 D:1			
合計	T:24 H:1 Fe:1 玉:1 炭:1	T:157 H:7 Fe:7 D:1 P:1 K:3 Ga:18		T:324 H:55 Fe:22 D:3 K:7 Ga:19 Gl:1 Su:1 S:2 Z:1		T:259 H:40 Fe:24 D:3 C:2 P:2 K:2 Ga:16 S:2 玉:1	

T:陶磁器 766 S:石器 4 H:土師質 103 Fe:鉄器類 54 D:土錘 7 C:古銭 2 P:キセル 3 K:瓦 12 Ga:瓦質 53 Gl:ガラス 1  
玉:鏡徳の玉 2 Su:須恵器 1 炭:炭 1 Z:プラスチック 1

## 第2節 実測遺物

### 1. 石器類

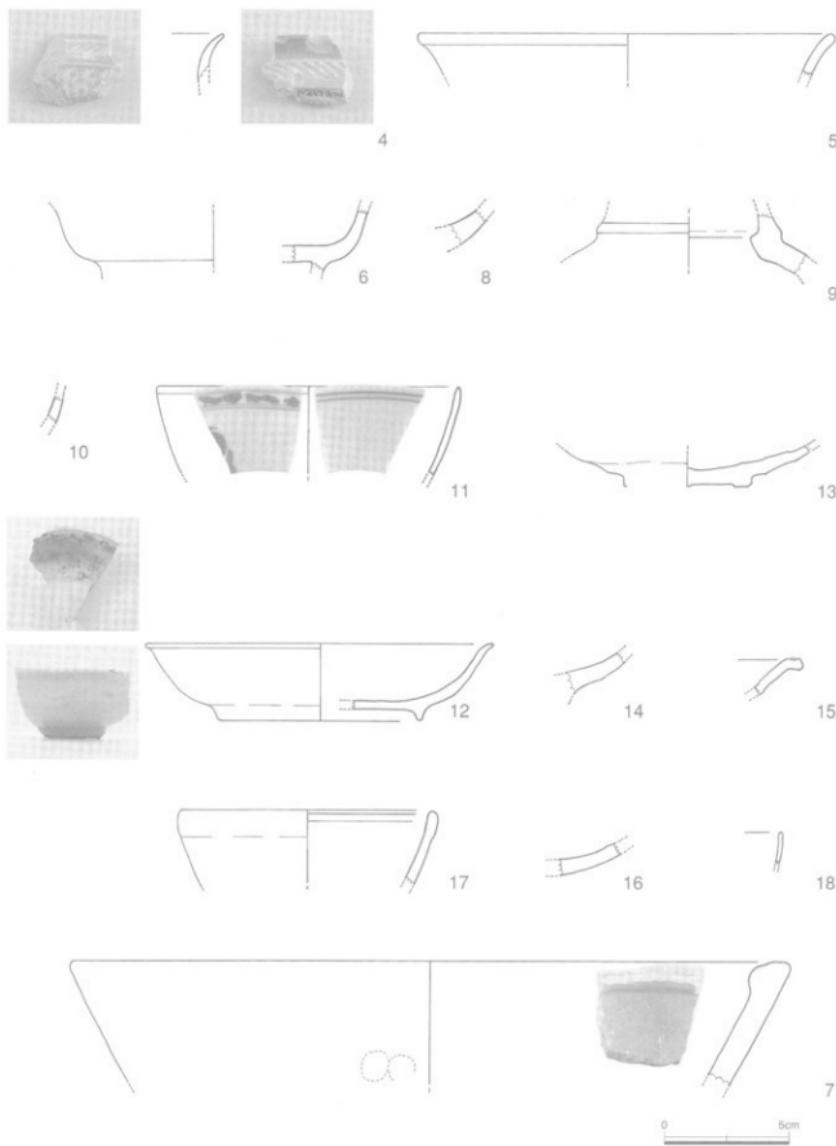
1は、磨製石斧で先端部が剥離している。2は、蔽石で両面が平坦石で、長い部分の両端に剥離跡がみられる。3は、蔽石で両面が平坦に近い石を用いており、直径3mmの穴が2点認められる。1～3の年代は土器等を伴わないので確かなことはわからない。また、2、3については用途も不明である。



第9図 遺物実測図1（石器）

第2表 出土遺物計測表

辨認番号	出土地点	器種	法量(cm)			色 調	色 調	出土・集成	備考
			口 径	底 径	高 度				
1	C区 5層	磨製石斧	長さ 6.3	幅 7	高さ 2.9				先端部 錐離有
2	C区 5層	石器	8.6	6.6	2.4				
3	D区 6層	石器	10.8	12.1	2.8	中央部がかすかに凹む、 直径3mmの穴2点あり			
4	C区 3層 N	縫跡				李銅 口縫部は外側へ大きく反る	動:灰白色 縫:オリーブ灰色	体～口縫部の片 15c後半	
5	D区 5層 N	縫跡				中國青銅、口縫は外側に広がる	動:灰白色 縫:オリーブ色	体～口縫部の片 15c後半	
6	B区 3層 S	縫跡 壓印				中國青銅	動:灰白色 縫:オリーブ色	蓋台～体部の片 15～16c	
7	B区 4層 S	瓦質土器 壓印	31.6			口縫部は邊「八」字状に広がり、 内側に施らみをもつ。深压印	外内:灰白色	体～口縫部の片 15～16c	
8	C区 7層					中國青銅	縫:灰白色	体部の片 15～16c	
9	C区 3層 S	縫跡 壓印				中國青銅	動:灰白色 縫:オリーブ色と錆黒色	体～口縫部の片 15c?	
10	C区 4層 S	磁器				中國青銅	動:灰白色 縫:オリーブ色	体部の片 16c	
11	C区 10層	縫跡	13.4	高台径 9		中國青銅	動:灰白色 縫:灰白色	体～口縫部の片 16c後半	
12	C区 7層	縫跡	15.4	高台径 5.8	3.4	中國青銅 口縫は外側に広がる	動:灰白色 縫:オリーブ色	高台～口縫部の片 16c～17c	
13	C区 10層	縫跡				鹿津焼	動:にがい赤褐色 縫:オリーブ色	高台～体部の片 17c前半	
14	C区 3層 S	縫跡				鹿津焼	動:にがい黄褐色 縫:にがい灰オリーブ	体～口縫部の片 外側に割れてくすんだ赤い土が見られる	
15	D区 2層	縫跡				鹿津焼	動:灰色 縫:灰オリーブ色	体～口縫部の片 17c中頃	
16	C区 2層 N	縫跡 燒				鹿津焼	外内:灰オリーブ色	鹿～体部の片 17c	
17	D区 6層	縫跡 燒	11.6			青磁	動:灰色 縫:灰オリーブ色	体～口縫部の片 17c後半～18c	
18	A区 3層	陶器 茶碗				外内:灰白色	縫:灰褐色	体～口縫部の片 18c	
19	A区 3層	磁器				伊万里焼	動:灰白色 縫:明緑色	高台～体部の片 18c	
20	B区 4層 S	縫跡 茶碗	11.1	高台径 4.8	5.3		動:灰白色 縫:綠灰色	高台～口縫部の片(底部1/4遺存) 18c後半	
21	C区 3層 N	縫跡 燒		高台径 3.4			動:くすんだ淡黄褐色 縫:褐オリーブ色	底部の片 18c	
22	D区 3層 N	陶器				萬能染付	動:暗:灰色	体部の片 18c	
23	C区 3層 S	陶器 小鉢	14				動:灰黃色 縫:オリーブ色	体～口縫部の片 18c	
24	C区 3層 S	縫跡		高台径 5.2	(裏) 純燒		動:灰黃色 縫:オリーブ黄色	体部の片 19c前半	
25	C区 2層 N	陶器				唐人焼	外内:オリーブ灰色	体部の片 18c	
26	C区 2層 N	磁器				越前駄塗染付 口縫部に凹みが見られる	外内:くすんだ灰白色	体～口縫部の片 18c	
27	D区 4層 S	陶器				唐往鹿津	外:緋褐色 内:淡黃色	体～口縫部の片 18c	
28	C区 3層 N	陶器 洗鉢				備前焼	外内:にがい赤褐色	底部の片 18c	
29	B区 3層 S	陶器 洗鉢				逆「八」字状に広がる口縫部	外:黒褐色 内:にがい赤褐色	体～口縫部の片 18c	
30	A区 3層	土器質 底鉢					外:浅黃褐色 内:褐色	高台～体部の片 18c	
31	A区 3層	土器質	7			圓輪糸切り底	外内:浅黃褐色	体部の片 18c	
32	C区 5層	土器質 鉢?	3.8				外内:褐色	底部の片 18c	
33	C区 7層	土器質 鉢?	6.4			糸切り底	外内:浅黃褐色	底部の片 18c	
34	D区 4層 S	土器質	11	8	1.4	糸切り底	外内:褐色と淡黃褐色	体～口縫部の片 18c	
35	C区 2層 S	瓦				上部に漬が見られる	褐色と灰褐色	右下角の片?	
36	B区 2層	瓦					灰褐色	左端の一端	
37	D区 3層 N	土器	4.2	厚さ 1.3	孔径 0.35		外内:にがい黄褐色	完形	
38	D区 5層 N	土器	4.1	1.5	0.5		外内:にがい黄褐色	完形	
39	D区 5層 S	土器	4.8	1.5	0.5		外内:灰黃褐色、黑褐色	完形	
40	D区 4層 S	古鏡				寛永通寶			
41	B区 3層 N	漆器							
42	D区 5層 N	鉢器						謙?	



第10図 遺物実測図2（陶磁器類1）

## 2. 陶磁器類

4は15c後半の李朝の磁器で口縁部は外側へ大きく反る。5は15c後半の中国青磁の碗で口縁部は大きく外側に広がる。6は15~16cの中国青磁の香炉で高台~体部の片が残っている。7は15~16cの瓦質土器の擂鉢で、口縁部は逆「八」の字に広がり、内側に膨らみをもつ。外側には指圧痕も認められる。8~10は中国青磁で、8は15~16cの碗である。9は15cと思われる壺である。10は16cのもので碗の一部である。11・12はともに中国青花で、11は16c後半の碗である。12は、16~17cの鉢で口縁は外側に広がる。

13~16は唐津焼で、13・14は17c前半、15は17c中頃、16は17cのものである。13は皿の底部で、14の外側には一部にくすんだ赤い土が見られる。15は皿の口縁部で、16は碗の体部である。17は17c後半~18cの青磁の碗と思われる。18は18c頃の陶器の茶碗である。19は18c頃の伊万里焼の磁器である。20は18c後半の磁器の茶碗である。高台~口縁部の片で、底部が4分の1遺存している。21は18cの陶器の碗である。22は18cの陶胎染付である。23は18cの陶器の小鉢である。

24は19c前半の萩焼の碗である。25は唐人焼である。26は肥前陶胎染付で、口縁部に凹みが見られる。27は須佐唐津である。28は備前焼擂鉢の底部の片である。29は逆「八」字状に広がる口縁部を持つ擂鉢である。25~29は年代が不明のものである。

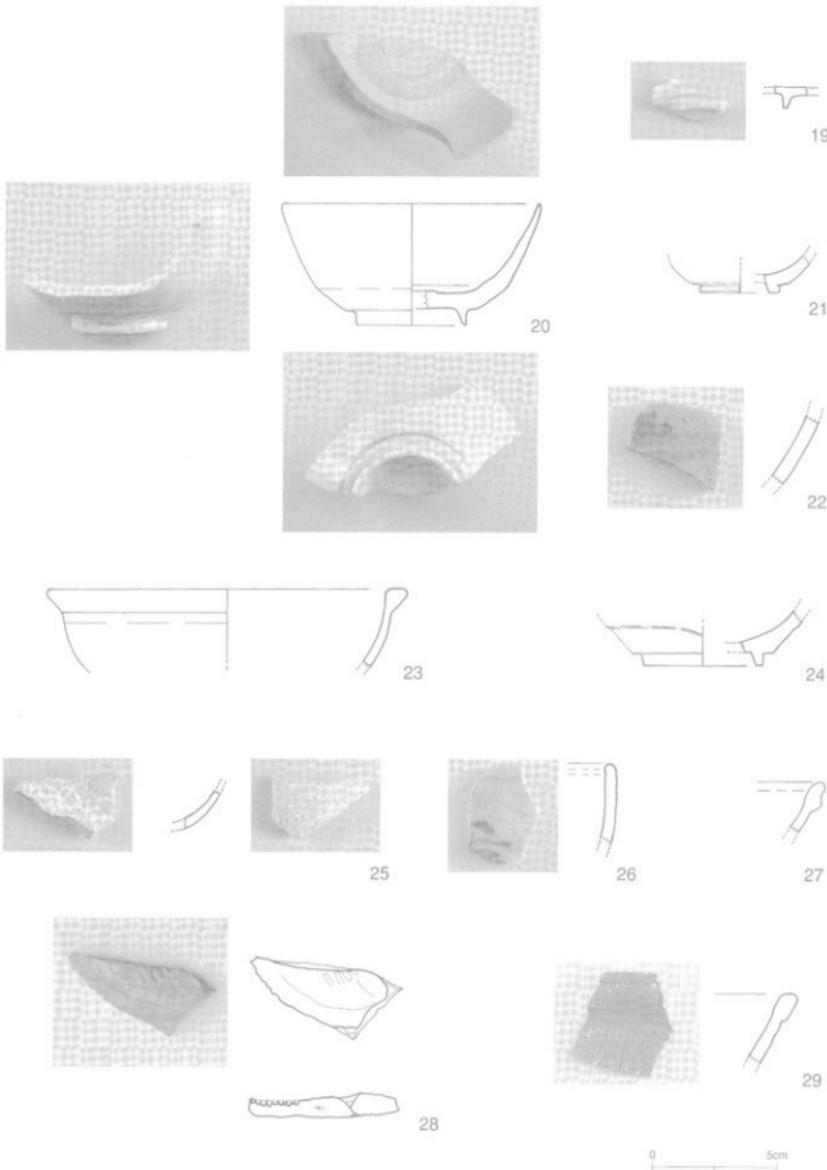
## 3. その他

30は18cの土師質の擂鉢で、高台~体部の片が遺存している。31は土師器皿で回転の糸切痕が見られる。32は鉢の底部と思われる。33は糸切痕のある杯と思われる。34は土師器皿で糸切痕が確認できる。31~34の年代は、いずれも17c初め頃のものである。

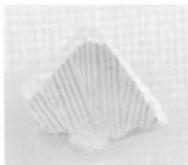
35・36はともに瓦で江戸期のものと思われるが実際の年代は不明である。35は暗い灰褐色で、上部に溝が見られ、右下角の片と思われる。36は左端の一部と思われる。

37~39は、いずれも土錘の完形である。3点とも年代は不明であるが、おそらく江戸期のものと考えられる。

40は寛永通寶である。41は煙管の完形である。42は鉄製の鎌の一部と思われる。鎌に覆われており、正確な大きさや形は確認出来なかった。



第11図 遺物実測図3 (陶磁器類2)



30



31



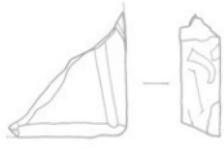
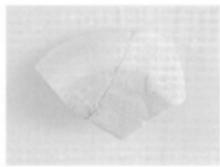
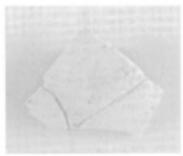
32



33



34



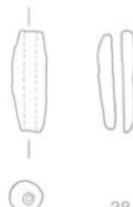
35



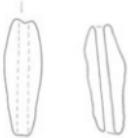
36



37



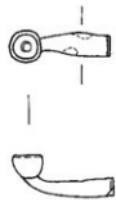
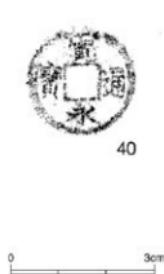
38



39

第12図 遺物実測図4（その他1）





第13図 遺物実測図5（その他2）

## 第5章 小 結

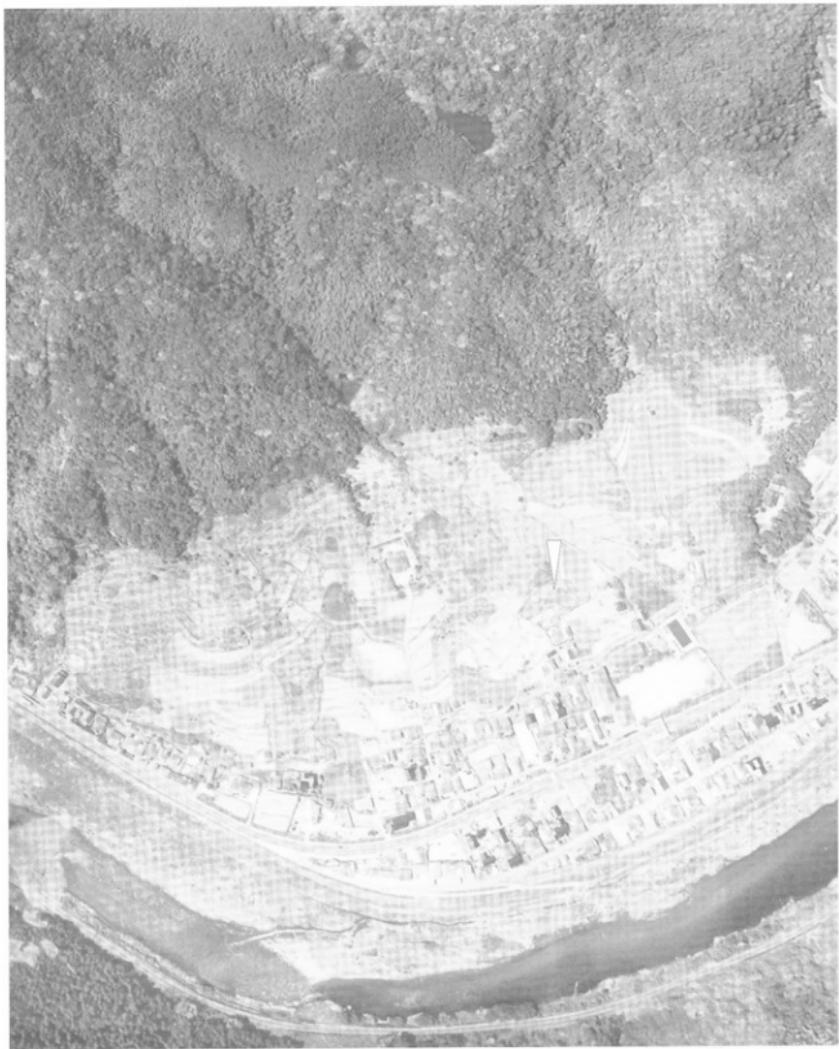
本遺跡は、平成17年度に実施した試掘調査により遺跡の所在が確認されたものである。試掘調査での出土遺物は、ほとんどが江戸時代の陶磁器類であったため、本遺跡に隣接する青原代官所と同時代の遺跡であることが予想された。

今回実施した本調査は、開発事業に伴う緊急の調査であったため、調査日数、調査面積とも制限された状況であった。しかも、第3章でも触れたように、水田開発等により当時の地形が大規模に破壊された状態で、遺物を収集する形での調査となった。そのため遺跡を正確な形で確認することは出来ず、しかも狭い範囲での調査のため、全体を把握できるものではなかった。そのことを最初に断った上で、以下気付いた点を記したい。

発掘調査の結果、地形や土層から判断すると、少なくとも3回の水田開発が行われ、最終的に現代の水田になったと考えられた。そして、西側は耕作土の下層が地山であり、東及び南側は低く、現況の高さまで盛土されていることが確認できた。おそらく西側の削り土を東側及び東南側の低い所へ埋めていると想像できた。想像の城は越えないが、もともとは調査区の西側が一段高い地形であり、そこに住居的な施設などがあったのではないかと思われた。また、遺物の出土状況から推定すると、石器類と陶磁器類が同層から出土していることや、遺構などがほとんど確認することができなかつたことなどからも、幾度の水田開発により破壊されたのではないかと考えられた。

さらに、出土遺物から判断すると、16世紀以前の遺物も僅かに確認することができるが、多くは17～19世紀の陶磁器であり、代官所があった江戸時代に調査区周辺を含めて、人々が生活していた場所であることは明らかであった。

以上、発掘調査の成果を基に気付いた点を述べた。残念ながら本遺跡と青原代官所を関連づけるものは検出できず、また、本遺跡と隣接する青原代官屋敷遺跡と関連づける古墳時代の遺物等も確認することができなかつたのである。



1 調査地点鳥瞰

図版 2



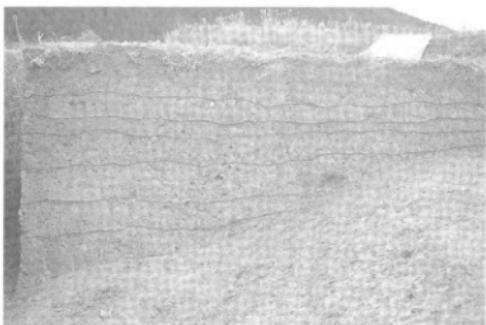
2 南からみた遺跡の近景



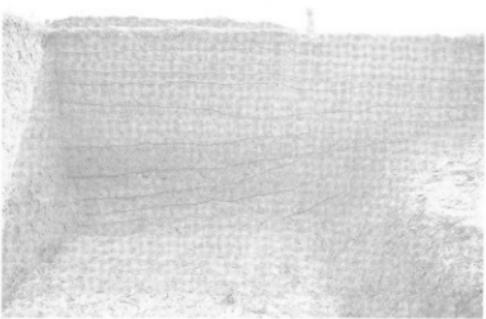
3 北からみた遺跡の近景



1 B 調査区北壁

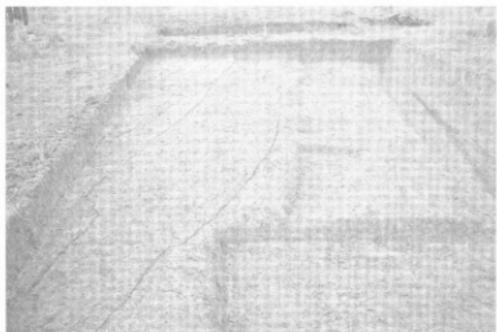


2 B 調査区南壁



3 C 調査区南壁

図版 4



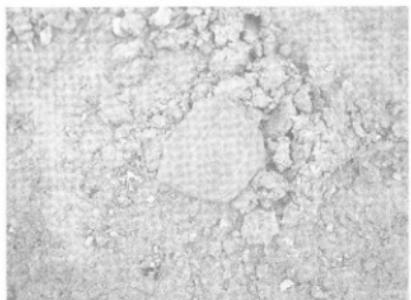
1 SD01 検出状況（南から）



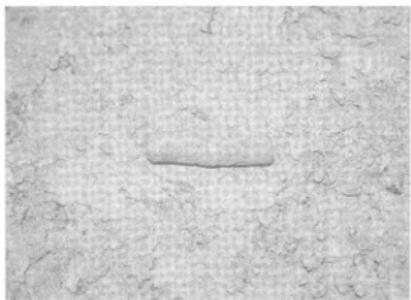
2 SD01・02 完掘状況



3 SD01 土層（北側）



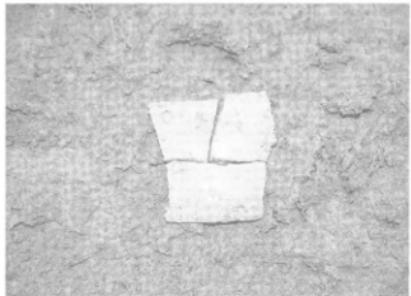
1 石器出土状况



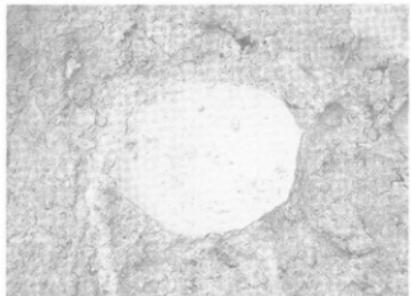
2 土锤出土状况



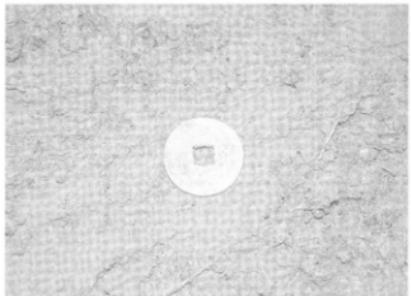
3 陶磁器出土状况



4 陶磁器出土状况



5 陶磁器出土状况



6 古钱出土状况



1 発掘作業風景



2 発掘作業風景



3 発掘体験授業風景（青原小学校）